

ツーリストの視点で見た 「沖縄イメージ」を通じて日本を問う



沖縄の持つリアリティの二重性に 学問的関心を持つ

もともとは、その著作『ディスタンクション』などで世界に影響を与えた、フランスの社会学者ピエール・ブルデューの理論を研究していました。社会学は反省的に自己を客観化するリフレキシビティ（再帰性）を持つ学問です。沖縄と出会ったことが、自己を問い直すきっかけとなりました。

1996年に、琉球大学で日本社会学会大会が開かれました。大学院生だった私は、何となく南の島を旅行してみたいといった軽い気持ちで、参加したのです。観光気分で行った沖縄は、本土とは「何が違う。いや、何もかもが違う」と、私の中に強烈な印象を残しました。そのときは、沖縄を研究しようとまでは思わなかったのですが、2000年にたまたま琉球大学に勤めることになり、状況が一変しました。

2000年にはサミットが沖縄で開かれました。沖縄を舞台にした映画『ナビィの恋』がヒットし、『沖縄オバァ烈伝』はじめ沖縄関連の本や雑誌が、次々と出版されました。いわば沖縄ブームの始まりです。そんな時期に、私自身が沖縄に移住することになったのです。東京とはまったく違う気候や独特な地形、完璧な車社会、時間感覚の違い、大きな影を落としている基地の存在……沖縄での生活は戸惑うことばかりでした。ある教授には、酒席で「ヤマト（本土）の人間には沖縄はわからない」とも言われました。

外から来た人間で、沖縄のことは何も知らない。でもだから

こそ、やれることがあると思えるようになったとき、自分の中で沖縄が重要なテーマとなってきました。調べれば調べるほど沖縄の深さが見えてきて、沖縄から日本を問うていきたいと思うようになったのです。沖縄は、「戦争と基地の島」であると同時に、「リゾートと癒しの島」でもあります。研究対象として、この相矛盾する状況がパラレルに存在する状況、つまり「リアリティの二重性」に関心を持ったのです。

戦争と基地の島・リゾートと癒しの島の イメージと実際

米軍基地の存在を沖縄の人はどう考えているのでしょうか。軍用地や軍雇用、米兵向けサービス業など、たしかに「基地で食べている」人もいて、それに依存せざるをえない現実もあります。ですがそれは、沖縄の人たちが戦後の貧しい中、生きるためのしたたかな知恵に変えてきた部分でもあるのです。例えば、給料が安く、雇用環境が恵まれない中、暮らすには足りない分や子どもの世話を、家族に頼ることがあります。こうした経済環境が、伝統的な家族のつながりを結果的に強めている側面があります。基地の問題も、外からの絶対的な他者に強いられた状況を、自分たちなりに都合よく読みかえて活用していく、生活の知恵が働いているように思われます。

一方の観光についてはどうでしょう。観光的なイメージは、沖縄県内の人々の地元意識にも影響を与えてきました。2000年のサミットも、2001年に放映されたNHKテレビドラマ『ちゅらさん』も、対外的にだけでなく沖縄の人にも、イメージを形成する作用をもたらしてきました。沖縄が注目されてきたことを、自分たちの誇りにつなげているのです。全国的に知られた伝統文化や食文化、オバァの人柄など、そういう固定化されたイメージに強い違和感を持つ人もいますが、むしろポジティブな自信を持つ人もいます。

広告の青い海・白い砂浜・ビキニの女性を 沖縄ではどう受け止めたか

「沖縄イメージ」に着目する上で重要だったのは、私が沖縄に住んでいながら、外から来た人間だったことです。沖縄の人からしてみれば、しょせんはよそ者で、変わり者にすぎません。その立場から沖縄を見たらどうなるだろうか。そう考えると、私の立場は旅行者、ツーリストの視点と重なってきます。

柳田國男、柳宗悦、島尾敏雄、吉本隆明、大江健三郎……一連の知識人たちに始まり、なぜ、どのようにして、現在のよ
うな沖縄のイメージが形成されてきたか。それを学問的に明ら
かにすることに関心を持ったのです。まだだれも十分に掘り下
げていないテーマでしたから、面白かったですね。

県外の人を持つイメージが、沖縄の人にも影響を与えている
わけですが、そのイメージは時代とともに変わっています。例
えば、戦争。体験者の方は死去するか高齢化し、多くの沖縄の
人にとって、戦争はますます間接的に聞くものになりました。
「戦争の沖縄」のイメージ化は、沖縄でも進んでいるわけですね。

沖縄のイメージをどう作って、外向けにマーケティングして
いくか。それを地元の人がどう捉えるか。外と内とでイメージ
が作られていくダイナミズムが面白いと思います。

当然ながら外からのイメージのほうが、実感に基づかずに作
られたものが多い。(1) 青い海 (2) 白い砂浜 (3) ビキニの
女性が、航空会社や旅行会社が広告でアピールする沖縄のイ
メージの三種の神器となった時期がありました。「日本にあり
ながら異質な沖縄」を強調しているわけです。外からのイメ
ージへの違和感に対して、沖縄の人は「それは違うよ」と言いな
がらも、自分たちなりに認めている部分もあります。私の調査
では、「青い海」や「明るく元気」などのイメージが、地元の
人の実感にも合致しています。しかし、「観光客が言うなよ」
という意識があるのも事実です。とはいえそうした意識は、実
はどの地方にもあるものでもあるんですね。

よそから来てうまく溶け込んでいる人は、自分が主役になら
ず1歩2歩下がって、地元の人を立てる術を身につけています。
なじめない人は自分たちだけで固まって、文化の相違に苦しみ
ます。その面白さやよさを味わえなければ、わざわざ沖縄に
住む意味もないように思えるのですが……。ところが、移住者
たちは独自のライフスタイルを創り上げ、現実の沖縄との違い
に関係なく、独自の文化を築いています。沖縄の新都心は、東
京とそう変わりません。一方で、本土でも沖縄が一つのライフ
スタイルになっています。ゴーヤやタコライスなどは生活に
ある程度根付いていて、特別なものとしてではなく、ふつうに
食されています。つまり、これらに見られるのは、沖縄の県内
と県外で、沖縄のものと本土のものが、相互に浸透しあって、
独自の沖縄スタイルを作り上げている事態です。

なお、沖縄移住者の手によって発行されていた雑誌『沖縄ス
タイル』は休刊しましたが、このたび新たに『momoto (モモト)』
が創刊されました。そこでは、地元のローカルな文化の深さや

面白さを、移住者の人たちが新たに発見して、地元の人たちに
伝えていくという、興味深い構図ができています。

沖縄スタイルにはグローバルな市場経済を 乗り越えるヒントがある

沖縄の文化の面白さを相互に認識し、沖縄の捉え方がどんど
ん変わってきている一方で、ずっと懸案の普天間基地の移設問
題など、何も変わらない部分があるという憤りが、一方ではあ
ります。沖縄ではすでに戦後60年以上、基地がない状況が考え
られなくなっている面もありますが、日本の中での公正さという
視点からいうとどうでしょうか。約75%もの日米軍基地を、
国土面積わずか0.6%の沖縄に集中させるなど、日米安保の拠点
として、一つの県にそこまで負担を掛けていいのかという問題で
す。これは、「沖縄問題」として片付けるのではなく、むしろ沖縄
県外の人こそが真剣に向き合うべき問題なんですね。遠くかけ離
れた場所に基地が集められているために、あまりにも軍事的な面
に鈍感なままでいられる日本人の姿が、沖縄からは見えてきます。

私は最近、アメリカ中心のグローバル化や新自由主義、格差
社会の諸問題に目を向けています。今まさに問われているのは、
様々な富の分配・再分配の問題です。グローバルな公正さとい
う観点からすれば、自分たちの利益を追求するばかりでなく、
自分たちにとって得になるわけではない他の人たちの立場も、
想像力をもって考えることが重要です。お互いがwin-winにな
れる関係を、どう築けるかが重要なのです。

沖縄はそのヒントを与えてくれます。独自のゆっくりした時
間意識、伝統的な人の結びつき、ものがなくとも豊かに暮らせ
る沖縄……これらは、すべてのものが金銭に還元できるもので
はないことを示しており、市場経済を乗り越えるヒントを与え
てくれるのではないのでしょうか。(談)



社会学研究科准教授

多田 治

Osamu Tada

1970年生まれ。1994年早稲田大学政治経済学部政治学科卒
業、2000年早稲田大学大学院文学研究科社会学専攻博士後
期課程満期退学。1999年早稲田大学第二文学部助手、2000
年琉球大学法文学部講師、2003年琉球大学法文学部助教授、
2006年一橋大学大学院社会学研究科助教授、2007年同准教
授に名称変更。著書・共著に『沖縄イメージを旅する——
柳田國男から移住ブームまで』(中公新書ラクレ)、『沖縄イ
メージの誕生——青い海のカルチュラル・スタディーズ』
(東洋経済新報社)、『沖縄に立ちすくむ——大学を越えて深
化する知』(共編著・せりか書房)